

2200年前頃の弥生時代前期環濠集落が発見された堅田遺跡は和歌山県御坊市湯川町^{たから}財部にあり、日高川の河口近く、北岸に形成された標高約2mの自然堤防上に立地している。微高地で、原始・古代から利用された自然堤防上には、集落・^{ぐんが}郡衙・館跡が東西に点々と連なり、現在、遺跡の周辺は県下第2の日高平野の内陸部となっている。鎌倉時代の建暦2年(1212)の^{けんりゃく}蘭宝郷^{そのたからごう}の四至を示した後鳥羽院庁下文に「西限 田井船津出井」と記されているように、鎌倉時代に遺跡の西に所在する田井集落あたりまで船が上っていたことが窺われ、また河口付近に^{さす}砂州^{さす}の発達が見られるなど、環濠集落が営まれた当時、その背後の集落跡近くまで^{がたこ}潟湖・入江が展開する良好な泊まり場であったことが考えられる。

出土土器から、この集落は畿内(古)段階の前期前半に始まり、おそくとも(中)段階か(新)段階初め頃には環濠を掘削し、その末には破棄されて廃絶している。短期間におえる集落である。環濠を巡らした時期の集落規模は、環濠を含め南北が約150m、東西が約120mで、調査を行った西辺では外・中・内濠からなる3条の濠を巡り、外と中濠の間には^{どるい}土塁が築かれていた。このうち最も内側を巡る濠は集落を全周し、東辺では深さ約1.30、幅約20m以上の落ち込みが環濠に沿う様に弧状を描きながらめぐる事が確認されている。

濠・土塁以外の遺構としては、堅穴住居17棟、掘立建物としては溶炉遺構の覆屋を含めて2棟、このほか大・小約120基の土坑や多数の柱穴が見つまっている。堅穴住居のうち4棟は韓国が源流とされる松菊里型住居で、その1棟からは多量のチャートの石屑に伴ってドリルとわずかであるがサヌカイトの石鏃の完成品が出土し、石器工房であることが明らかとなっている。このほか、作業台石を伴う^{ソングンニ}松菊里型住居、中央の炉状の落ち込みとは別に^{しょうろこう}焼炉坑を付設する堅穴住居など、銅を溶かした溶炉遺構を含め、工房的な性格をもつ建物・住居が多い特徴が見られる。

遺物は^{せいどうき}青銅器ヤリガンナの^{いがた}鋳型、^{つぼ}壺・^{かめ}甕・^{はち}鉢・^{たかつき}高杯や^{とったいもんどき}縄文系の突帯文土器のほか、石器としては^{ふとがたはまぐりばせきふ}大陸系磨製石器とされる^{えぐりいりちゅうじょうかたば}太型蛤刃石斧・^{へんぺいかたば}挾入柱状片刃石斧・^{へんぺいかたば}偏平片刃石斧・石ノミをはじめ、^{たとうかんじょう}多頭環状石斧・^{せきぞく}環状石斧・^{いしきり}石鏃・^{いしぼうちょう}石錐・^{くさびがた}石包丁・^{せきぼう}楔形石器・^{れき}石棒・^{すじといし}礫石器・玉を磨いた筋砥石が、木製品としては^{たてぎね}竪杵・^{たかつき}高杯・^{せまぐわ}挾楸・^{いしおの}石斧の柄に加えて、^え諸手楸・^{もろてぐわ}広楸・^{ひろぐわ}丸楸・^{まるぐわ}鋤などの未成品がある。そのほかに、^{ぼうすいしゃ}土製紡錘車が出土している。特に土器については、胎土に地元の土器には見られない砂粒が含まれ、形・文様などから明らかに^{はんにゅうひん}搬入品と明確に識別できる土器がかなりの割合で存在し、朝鮮系の無文土器も確認されている。地元で作られた土器の中には、他地域の影響が顕著に認められるものもある。

この環濠集落については、集落の約4分の1を発掘したにすぎず、水田跡・墓地も明らかでないが、搬入土器や地元で作られた他地域の影響を受けた土器から考えられる海を介した広域的な^{つな}繋がりと、この集落が地理的に瀬戸内海と太平洋とをむすぶ紀伊水道に面し、東・西日本の境に位置することから、東西を結ぶ海洋ルートの中継港として役割を担った集落と考えられる。